ｱﾌﾘｶ諸国と日本との協働型ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ実現のためのﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑﾃﾞｻﾞｲﾝ
―ｺﾝｺﾞ民主共和国と日本の EDGE ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑを事例として―

長谷部葉子
Email: happ3248@sfc.keio.ac.jp

*1: 慶應義塾大学環境情報学部

◎Key Words 異言語異文化ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ, 協働型ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ環境構築, ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ型ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑﾃﾞｻﾞｲﾝ

1 はじめに

本研究に於いては、ｺﾝｺﾞ民主共和国国立教員大学と慶應義塾大学環境情報学部・総合政策学部及び大学院政策・ﾒﾃﾞｨｱ研究科が 2016 年 11 月に 5 年間の交流協定を締結したことを機に、活発な交流実現のための双方向的な異言語・異文化理解を深め、ﾘｱﾙﾀｲﾑで有効なｵﾝﾗｲﾝ交流を実施する交流環境構築のﾌﾟﾛｾｽを検証するものである。本研究は、2017 年 2 月 27 日 - 3 月 2 日に慶應 SFCEDGE Global Innovator Course が開催した、Global Innovation Forum Spring 2017 を事例として取り上げた。

この Forum は think, make, communicate をｺﾝｾﾌﾟﾄに、ｲﾉﾍﾞｰｼｮﾝでｸﾞﾛｰﾊﾞﾙな企業を志す人材を育成ｽﾙﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑで、3 日間の集中ﾜｰｸｼｮｯﾌﾟ、ﾌﾟﾚｾﾞﾝﾃｰｼｮﾝで構成される、滞在型教育の形態のﾃｰﾏ別ｸﾞﾙｰﾌﾟﾜｰｸによるもので、開催地は日本の慶應義塾大学湘南藤沢ｷｬﾝﾊﾟｽだった。そこにﾘﾓｰﾄﾊﾟｰﾄﾅｰとしてｲﾝﾄﾞ、ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ、ﾏﾚｰｼｱ、ｼﾝｶﾞﾎﾟｰﾙ、ｺﾝｺﾞ民主共和国が参加した。この Forum の開催は 3 年目を迎えるが、ｵﾝﾗｲﾝでのﾘﾓｰﾄﾊﾟｰﾄﾅｰの参画は初めての挑戦となった。

日本とつなぐ 5 か国は、それぞれに個人の住居からの個人参加が主で、その中で一番参加条件が厳しいと思われたｺﾝｺﾞ民主共和国は、2 ﾁｰﾑが国立教員大学のｺﾝｺﾞ・日本言語文化交流ｾﾝﾀｰから参加した。また実験的にｺﾝｺﾞ民主共和国の 2 ﾁｰﾑのみ、日本からの大学生がﾁｰﾑﾒﾝﾊﾞｰとしてｺﾝｺﾞに渡航し加わることで、協働ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑとしての体制を整えて参加した。

本研究は、異言語・異文化ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝのｶﾘｷｭﾗﾑﾃﾞｻﾞｲﾝとして、以上のような状況下での円滑なｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ環境構築へのﾌﾟﾛｾｽに関する実践的研究である。なお、今回のﾘﾓｰﾄﾊﾟｰﾄﾅｰとのｵﾝﾗｲﾝｺﾈｸｼｮﾝには、WebEX ｼｽﾃﾑを用いた。

2. 異文化理解に立脚したｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ環境構築

2.1 ｺﾝｺﾞ民における対人ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ傾向

ｱﾌﾘｶ諸国との協働ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄというとどうしても直接現地へ出向き、現地事情を調査するｶﾀﾁでの現地からの情報受信型であり、現地での直接的なｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝありきで、ｵﾝﾗｲﾝでﾘｱﾙﾀｲﾑのｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝはもともと成功しないという思い込みがｱﾌﾘｶ諸国、日本の双方にあることは否めない。確かに何か提案をし、合意形成をする上で真っ先に重視されるのは、対面式で相手の人物・人間像を把握し、その上で次のｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝｽﾃｯﾌﾟあるいは、信頼関係構築のｽﾃｯﾌﾟに進み、その次にやっとそれぞれの言い分に耳を傾け、合意形成に至る、つまり徹底的な直接の人間観察に基づいたｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝによって、関係性の全貌が構築される。これがｱﾌﾘｶ諸国、特に本研究の研究拠点のｺﾝｺﾞ民主共和国に顕著な傾向である。

2.2 ｺﾝｺﾞ民におけるﾈｯﾄﾜｰｸｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ環境

しかしその一方で、町中では、複数の携帯電話を持ち歩く人々が闊歩し、また What ' s Up などの SMS でのｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝは極めて活発で、ｲﾝﾌｫｰﾏﾙな場面では、SKYPE も良く利用される。このような簡易的でｲﾝﾌｫｰﾏﾙなｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝはこの数年特に顕著で、情報交換が国境を越えて頻繁に行われ、対面式のｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝにより関係性構築がなされるとその後の友好関係は SMS により持続的なものに発展する。

またｱﾌﾘｶ諸国の国立大学を連携させる African Vertual Campus (以下 AVC と略) のﾈｯﾄﾜｰｸも立ち上がり、各国首都の主要な国立大学には国家予算で AVF 専用施設が設置され、ﾘｱﾙﾀｲﾑでのｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝﾈｯﾄﾜｰｸ環境はﾊｰﾄﾞ面では、整備されつつある。また国立大学の専任教員全員にﾉｰﾄ型 PC が提供されているが、この目的は本来有効的な講義配信であるが、実際メール以外で授業に用いている教員は、30%に満たない (ｺﾝｺﾞ民主共和国) のが現状である。

また SMS が活発であるとはいえ、電波の状況は必ずしも良いとは言えず、込み入った内容や合意形成のための議論には、適していないのが現実である。

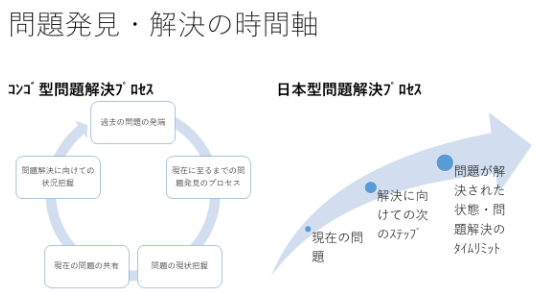
3. ｺﾝｺﾞ人と日本人の時間概念の差異

上記を踏まえた上で、ｵﾝﾗｲﾝ接続は成功し、いざ議論が始まった時点でｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝの展開にｺﾝｺﾞ人と日本人の時間概念の差異が大きな影響を及ぼす。ｺﾝｺﾞ人は、今手元にある現在に全ての焦点を当て、重きを置いているので、過去にさかのぼって現在に至るプロセスに最大の時間をかけ、事細かに説明をし、その現状把を

最重要事項とするが、その先の目標及び計画的かつ戦略的な展望は述べるに至らない。逆に日本人は、現状からその先に設定した目標、ｺﾞｰﾙを見据えての議論を展開し、現在に至るまでの過去のﾌﾟﾛｾｽは割愛して議論する傾向がある。そのため、ｺﾝｺﾞ人と日本人の議論となる時間軸が過去ｘ現在と現在ｘ未来と食い違うため、限られた時間内でのｵﾝﾗｲﾝｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝでは両者が十分にそれぞれの特質を生かしたｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝﾌﾟﾛｾｽを踏むことが出来ず、ｼﾞﾚﾝﾏに陥り、また限定的なｵﾝﾗｲﾝｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝからは、合意形成以前の段階でﾀｲﾑﾘﾐｯﾄを迎えることになり、議論にまで発展せずに終わる傾向が分かった。

図１生活環境に浸透する時間軸の概念の差異

図２　問題発見・問題解決の時間軸に沿ったﾌﾟﾛｾｽ



4. 円滑なｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝを促すﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑﾃﾞｻﾞｲﾝ

ﾘﾓｰﾄﾊﾟｰﾄﾅｰとして、上記Forumに参加するうえで、3でのべたｺﾝｺﾞ人と日本人の理論構築の思考過程における時間軸の差異、つまりはズレを想定した共通ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑの補足ﾊﾞｰｼﾞｮﾝとして毎日日本とのｾｯｼｮﾝの事前事後に追加した。ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑﾘﾓｰﾄﾊﾟｰﾄﾅｰのｺﾝｺﾞで、日本人と協働でｺﾝｺﾞ人の思考過程の時間軸である過去にまで遡った問題発見ﾌﾟﾛｾｽを共有したうえでの、現在―未来志向型の日本人型思考過程の時間軸への参加が容易になり、ｵﾝﾗｲﾝでの制約時間内での議論展開がｽﾑｰｽﾞにいくようになった。

詳細のﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑﾃﾞｻﾞｲﾝはここでは割愛するが、当初ﾘﾓｰﾄﾊﾟｰﾄﾅｰとのWebEXｼｽﾃﾑを用いてのｾｯｼｮﾝは4日間の会期中に30分間を2回のみ予定されていたが、ｾｯｼｮﾝの開始10分間は、接続環境確認に終始し、本題の議論の時間が削られ内容が中途半端になってしまった。その過程で段階的な議論展開、合意形成へのﾌﾟﾛｾｽの共有の必要性が強く認識され、結果的に毎日60分間のｾｯｼｮﾝ時間が設定され、その上で、思考過程の時間軸の差異を調整するために、共通ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑのｾｯｼｮﾝの事前事後に補足ﾊﾞｰｼﾞｮﾝとして追加された。これによりｺﾝｺﾞ人、日本人双方の思考ﾌﾟﾛｾｽの時間軸の全てが共有され、参加者全員のﾓﾃｨﾍﾞｰｼｮﾝが上がり、議論の展開、合意形成ともに円滑に行われた。またこの思考のﾌﾟﾛｾｽの時間軸の調整を行ったことで、参加者全般の行動規範における時間軸の共有もなされ、時間厳守の価値の存在そのものが問われかねないｺﾝｺﾞにおいて、ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑに於いて、参加者全員が時間厳守が徹底されたことは興味深い結果である。

５．おわりに

異言語・異文化理解及びそのｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝにおいて、思考の時間軸、行動の時間軸の差異による異文化間接触はつねに課題となっているが、その差異を敢えて肯定的にとらえ、補足ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑを展開することで、思考の時間軸が相互理解を促し、議論を展開し、合意形成に至るﾌﾟﾛｾｽとなることが本研究で分かった。このように補足ﾊﾞｰｼﾞｮﾝをﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑﾃﾞｻﾞｲﾝに追加することで、異言語異文化間の協働ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄの円滑な導入につながるというのは、一つの成果と言える。

参考文献

Walter Rodney, How Europe Underdeveloped AFRICA, 1981, Black Classic Press

Fernando M. Reimers, Vidur Chopra, Connie K. Chung, Julia Higdon, E. B. O' Donnell, Empowering Global Citizens-A World Course, CreateSpace zIndependent Publishing Platform